

<巻頭言>



新年を迎えて

網野 定三*

新年明けまして、おめでとうございます。

年頭に当たり、当会員各位の一層のご活躍と当会の発展を祈念し、本年も倍旧のご指導ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

昨年は、新世紀を迎え、明るい展望と期待をもってスタートした年でありましたが、予期せぬ米国の同時多発テロとその報復が、新たな戦争へ拡大するなど、国際社会に大きな混乱と失望を与えました。また、その後の各国の対応や世界世論の反応は様々であり、新ためて国際社会の複雑さと多様な課題を浮き彫りにしました。

さて、21世紀最初の ICOLD 年次例会は、歴史的な町、旧東独ドレスデン市で開催され、大事件の渦中でありましたが、大きな混乱もなく予定通り実施されたことは何よりでありました。

世界のダム建設は「反ダム」の勢いが一段と強まり、昨年も WCD の報告書を巡り様々な議論や動きがありました。本会議のシンポジウムにおいても、世銀、NGO 等の意見表明に対し、多くの発展途上国から厳しい反論がなされるなど、活発な議論が交わされました。このような国際的な場で冷静な議論を重ね「理解と協調」が得られる粘り強い努力が、今ダム関係者に強く求められています。特に、貧困問題を抱え、慢性的な水不足、洪水被害、電力不足等に深刻な多くの開発途上国は、ダム建設促進が急務であり、世界の関係機関と先進国等、国際社会の理解と支援が不可欠であります。

このような国際的な理解と協調のためには ICOLD の役割は重要であり、今後のリーダーシップと多大な努力が期待されます。

幸い本会議において、馬場恭平氏が副総裁に就任されました。氏

* (社)日本大ダム会議 会長、開発工事(株) 顧問

は長年 ICOLD の活動に参加し、その重責を十分認識されており、今後の活躍が大いに期待されます。また、JCOLD としても大変名誉なことであり、全面的に支援していきたいと思えます。

日本の開発途上国への協力は、政府開発援助（ODA）を中心に拡大し、現在でも世界最大の援助国であります。最近の長期景気の停滞と財政悪化等により、全般的にやや停滞感が見られます。

今後の協力は、日本の特に優れたダム水源地周辺の環境や住民対策等の多様な技術と、有効な施策を中心に移転促進すること、またコスト競争力のある民間企業の積極的な参入等が、名実ともに実効のあがる協力であり、これが先進国日本の責務でもあります。

また、これらの多様な協力には、日本からの情報の発信と相手国の適格なニーズの把握が先決であり、かつそのための友好関係が重要であります。これらはいずれも JCOLD の大きな役割であり、昨年このような観点から、韓国との定期交流に合意しました。今後もこの経験を生かし、当面はアジア諸国との、より良い交流へ発展させたいと考えております。

今世界はグローバル化し、世界の世論は一国の政策に強く影響する時代であり、国際協調の必要性が高まっております。日本の「脱ダム宣言」についても、諸外国から強い関心もたれており、今後とも、国内での冷静な議論と正当な評価を通して、日本におけるダムの必要性と健全なダム事業の推進を、世界に発信する必要があります。

新年に当たり「大ダム会議」の役割を再認識し、大ダムへの理解と信頼性の向上のため、本年もその職責を果たしていくとともに、会員各位の諸活動への積極的な参加とご協力をお願いし、新年のご挨拶と致します。